

特集「内観の原点を探る」

内観を必要とする時

竹内 硬

明治38年福井県に生まれる。元信州大学教育学部教授（心理学）。早くから内観に関心をもち、多くの弟子を内観に送った。昭和40年に「内観法について」と題する英語論文を著している。昭和56年に逝去。

内観法がどういう場合には効果があり、どういう時には効果がないかを明示する必要があるという人がある。わたしはこのことについては、大体本人が本気で内観をやるつもりになって、実施しているときは効果があがり、人まねや、他人から強いられたり、自分からとにかく、さしてやる気がないままに内観をやっているときは効果も期待されないものだと思える外にないように思う。だから或る種の精神障害の患者のように、何事にも積極的に仕事に取りくむ気力

のないものは問題にならない。

しかし、一体正常の人でも本気で自分自身を見つめ、ひとつ生まれかわってやろうなどという盛んな情熱を自分自身の中にもえ立たせる時はどういう時であろうか。禅宗ではいつも「生死事大、無常迅速」と教えている。即ち人間は何人もいつ死ぬかわからない。一刻も早く悟りをひらいて迷いの世界から脱却して、死の問題を解決しなければならぬというのである。いつの世でも人間に死という障壁が免れないもの

である以上、この問題との格闘から内観実習にふみきる人もあるであろう。橋口勇信氏が内観によって「私はいつ死んでもいい」というような心境に到達したことを淡々と述べられるのも、その動機はとにかく、内観の実習によって大悟徹底の境地に達せられた事を物語っているように思う。内観法は宗教であるか、ないか等と議論が多いがわたしは内観法は宗教と道徳と科学を総合する人間改造の大原則であると考えたい。

さて今日の多くの人びとはこのような死の問題解決をめざして内観の門に入るものは少ないであろう。しかし人間青年期ともなると思いがけない人生の難問に逢着してどうにもならなくなり、生きる道を失う場合がしばしば起こるものである。小中学時代成績優秀であり、自己共に秀才を自認していたものが、高校に入ってから一学期、中以下のわるい成績表をもらってすっかり自信をなくし、何もする気がしなくなってしまう場合、子供の時から信頼し切っていた愛

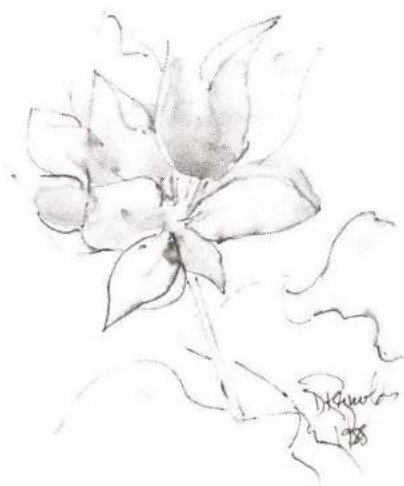
人にそむかれた場合、一時の迷いから悪事を働いて一生を台なしにした場合、何十年にもわたって一升酒をのみ、何とかしてやめたいと悩みぬいたがどうしても止められない場合など、この一点から人生の総立て直しの必要な場合が起こる。人間の脳髓ほど不思議なものはない。機械は「出来ること」と「出来ないこと」は明確で動かしようがない。しかし人間の脳髓は実に、この今までの生き方の生きづまりの頂点から新しい次元が開けるのである。人の脳髓には百億以上の細胞がつまっていたて、その中の半分もまだ人は使っていないという。恐らくこの新しい次元が開ける時というのは今迄使っていたあらゆる細胞を使いつくしても解決が見出されなかった時、この脳をしばらくつくして、未開拓の新しい脳細胞の世界にどっと拡大していった、全く新しい、広い、深い視野が開けて来たことを意味するのである。こうした転機はすべて過去の、行きづまった自分を見直し、反省するこ

とから生まれるものである。「反省すること
は「自己超越」の立場である。この自己超越こ
そは人間の脳髓が自らの力で、自らの脳髓を作
っていく基本的様式であると思う。

内観法などというとむづかしくなるが、之は
反省法であり、自己超越のための一方法である
にすぎない。だからそれには無限の方法が可能
である。毎日毎日の自己反省も内観の一様式で
ある。毎日生活しつつ、何の自己超越もなく、
同じことを連日くり返しているに過ぎない人は
真に人間として生きている人とは称しがたい。
そこには生きる情熱もわき起こらない。今日の
一日を反省し、之ではならない、もっと広く、
高い明日の自己を何とかして創造したいと切に
願うところ、内観は自ずから始まるのである。
そして今日の時代に生きて、入試や事業失敗
の不安、いつ何時事故で死ぬかも知れない不安
等々数多の生活不安の中に生きて、いささかも
動ぜざる、永遠の自己を確立したい願ひも、多

くの健康なる人びとの強い要求であろう。この
ような深い願ひの中にこそ「内観法」はそのす
ばらしい偉効を奏するのである。

（『心理療法としての内観』へ内観教育研修所
編より）



内観—INNENSCHAU

フランチ・リッター
石井 光 監修／古川裕子 訳

オーストリアの仏教専門誌「BOHI BAUM (菩提樹)」に掲載された、新世界内観研修所のフランチ・

リッター所長による内観についての論文を、今月より数回に渡って連載します。内観そのものは一つの方法論であって宗教ではありませんが、これは内観の本質を宗教的側面からとらえた貴重な論文です。

■心の道を生きる

ヨーロッパで、内観が行われるようになって十年になる。仏教の悟りへの道のさらに進んだ、全く新しい萌芽がこれによって西洋に根づいたのである。

内観はその外形と、その考察する内容とにおいて、他の仏教の修行法とは本質的に異なっている。長い間、私は内観を瞑想の一種としてとらえることに、ためらいさえ感じていたが、やがて内観の根本が私に明らかになっていくにつれ、この——元来の意味で瞑想的な——精神の道が、現代の人間にいかにも思えない幸福のチャンスを与えることか、ということが次第にわかっていった。

内観は、ブッダ涅槃のことは真剣に自己の生活に取り入れている人間に、きわめて厳格に妥協することなく迫ってくる。

“汝自らをよりどころとし、絶ゆることなく精進せよ”

こうした人々は、内観に自分の道を歩んでいくための確かな下地、支えてくれる基盤を見出して、その上を悟りと解脱とを求めて生涯に渡って努力しながら、歩み続けていくことができるのである。

内観にはグル、教祖は存在しない。創始者である吉本先生は、ご自身に寄せられるこの種のレッテルを、すべて徹底してはねのけられてきた。

「皆さんは内観しに来るんです。私のいうことを聞きに来るんではありません」

そのかわり、そこで発見するものは、内観をすることによって呼びかけられ、活動を始める内なる師、みずからの英知の力である。

内観によって、体験者は自己の成長、自分自身の生活態度

を、批判しながら取り調べる。ちょうど検事が裁判でとりおこなうのと同じように、科学的に、ごく仔細にわたって。体験者は自分自身に対する裁判官となって、自分がどこで間違いを犯したか、しかし、またどこで正しい行動をしてきたのかにも気づいていく。それによって、悪しき心の性癖が及ぼす影響の大きさがすべてわかり、それを排除することができるようになる。行為の結果が、事前にはっきりと眼に見えるようになるので、排除できるのである。

そうして、良き心の傾向は、強化されていく。そうした思い、その及ぼす作用が体験者自身、そしてさらにあらゆるものの利益となり、森羅万象をより良い未来へと導いていくことがわかっていくからである。

繰り返し繰り返し、内観のなかで人間はふと涅槃（ニルヴァーナ）の状態を体験する。それは存在の根源がかき消され消滅していく体験であり、事物の本質を見る体験である。ここではどこに目をやろうとも、自己の生成と存在をともたらしした諸条件を知り、自己の存在の発生と消滅の因果性を知る。

もちろん考え方の性癖は、まだそれで消失しはしない。しかし、その解脱の経験は存在における一つの転機となる。内観を終えたあとでは、心の向かう方向に変化が起こり、生きる力がわき上がり、さらにより有益な、解放を目指した生き方へと変わっていく。

内観ではあらゆる存在が内奥で結びついていること、その存在の互いに対する深い愛が私たち全てを生み出し、これからも育んでいくことをも体験するために、行動はより責任感に満ちたものへと変化してゆき、事物とこととのなりゆきとを、全体から眺めるものへとなっていく。

■内観の発展

五十年以上も前、吉本伊信先生は仏教の解脱の法に、ひとつの新しい伝統を築かれた。この時期、先生は「みしらべ」という名の浄土真宗の一派に古くから伝わる修行法を終了し、それによって悟りへと到達をされた。みしらべ法は極度に過酷なものだった。修行者は一週間、洞窟に引きこもり、「今死んだら、（私の魂は）何処へいくか」という問いを自らに課す。修行のあいだは、あらゆる飲食を絶ち、睡眠もとらない。そのために、ごくわずかの並外れて意思の強い人間しかこの責め苦に耐え抜くことはできなかった。

吉本先生は、この修行から、ふたつの深い認識をたずさえて戻ってこられた。

先生は、人間には完全な悟りを得る能力があるということを知られた。自分のような平凡な、汚れた人間が、これほど深い悟りを得ることができたのなら、ならば、これはどんな

人間にもできることだ。

二つめの認識は、ご自身の進路に関することであった。体質や精神的な能力に関わりなく、どんな人間にでもやり通すことのできる修行法を見出すことが、ご自分の使命であると悟られた。

このことを先生は、みしらべの間、ご自分に付き添われた二人の師に打ち明けられた。両師は即座に、先生のこの探究を支援する意向を示されたのだった。

■開始

吉本先生は探究を開始する。ご自分の元へやってくる人たちには、「今死んだらどこへ行きますか」という、みしらべの問いだけを課された。飲食と睡眠とは取らせてあげた。彼らがどこにしようと、先生はその問いの面接にまわられた。ご自宅の書斎では、修行者たちが屏風のなかに座っている。先生は毎時間やって来られ、質問の答えを問う。毎晩毎晩、最終電車を使ってまでして先生は各地を回り、人々を訪ね、彼らの自宅で面接を行われた。先生は刑務所に行って許可をもらい、受刑者たち、また死刑囚とさえ話し合われた。そうした人たちとも、先生は内を観る、「内観」を行われた。先生は、この新しい修行法をこう名付けられたていた。

経済的に独立するために、先生はご自身で会社を設立する。

会社の従業員たちは皆、内観を行った。会社は成長し、日本で最大の皮革製品卸売業に発展していく。先生が胸を病んで、何年もご自宅で療養なさっているときにも、事業は成長を続けていった。支店は日本全国に開設されていく。

先生は、経済的自立という目標をなし遂げられると、支店をご自分の部下たちに譲渡して、ご自身は奈良にある本部のみを手元に置き、そして今度は、それを改造して最初の内観研修所とされた。そのときから先生は、もはや内観の指導のみを行われるようになり、訪れる人にはだれでも完全に無償で指導をされた。

そうして沢山の人々がやって来た。常に最高四十人までもの人々が、毎週毎週、一年を通して先生のもとで内観を行った。先生の奥様、そして後には長島先生も助手となって先生を手伝われた。そのかわり、刑務所職員の支援も得て、先生は刑務所でも相変わらずに内観指導を続けられていた。

内観の外形は、もうすっかりと出来上がっていた。修行者は壁に向き合うか、もしくは屏風のなかに座して、自己の人生に思いを巡らす。内観面接者は一、ないし二時間おきに訪れ、内観者が何を思い出したのかを聞いていく。

■内観の方法

六十年代の半ばには、吉本先生は修法の核心となる部分も完成されていた。先生はみしらべの問いでの考察を、新しい考察方法に置き換えて、修行者の生き方に直接照準を合わせたものにしていかれた。

考察は人生を年代順に四年ないし六年で区切って、すなわち誕生から六歳まで、次は六歳から十歳まで、十歳から十四歳までというようにして行っていく。自分自身の行動がひとりの重要な人物、すなわち母親、父親、兄弟、配偶者、子どもなどとの関係において見つめられていく。つねに、その関係が始まった時点から（つまり母親なら誕生から）現在までもしくはその結びつきが終わった時点までを行う。対象となる人間はそのつど自分自身の鏡となり、私たちはその人の目を通して、自分自身を観るということを学んでいくのである。

■無知なる者への三つの問い

それぞれの年代において、内観修行者は三つの問に答えなくてはならない。

- 1 この人がこの時期、何をしてくれたか
- 2 この時期、この人に対して何をしていたか
- 3 この人にこの時期、どんな迷惑をかけたか

内観は、私たちをこの質問によって容赦なく自分自身の行動に目をむけるように仕向け、よく私たちの考え方を支配している（そして「観たくない」という心を後押しする）四つめの問い：「この人にどんな迷惑をかけられたか」を、さらに調べさせないようにする。

内観は、その簡単な、まったく単純素朴といつてよい方式により、私たちの経験しうる能力、知りうる能力のすべてと、内在するあらゆる力とを活動させ解放へと導いていく。内観は私たちのまだ消化されきっていない人生経験を役立たせ、現実を把握させていく。自分自身の人生の歴史を美化させることなく受け入れることによって、それと結びつけられていた感情、例えば怒り、悲しみ、失望、そしてまた愛、憧れ、歎び、幸福感までもが表面にもたらされ、今現在の意識によって新しく体験しつくされる。すべてが明らかにすることは、そうしてすべての解決へと通じていくのであり、生きて経験されたものは宝となって、自分自身の財産となる。いつでもそこに自分で手を延ばし、つかみ出すことができるからである。不愉快な体験もそうやって成長の助けとなり、内観のあとで私たちをさらに前進させていく。蓮の花は、その花を生み育んできた泥沼の中から咲きいでてくるのである。

（次号に続く）

内観について思う

奥村 二吉

明治38年福岡市に生まれる。現在岡山大学医学部名誉教授。

日本精神神経学会等の会長を歴任。昭和41年臨床精神医学の分野で初めて内観療法をてがける。「内観療法」(医学書院、昭和47年)の共編者。

内観の取得をした結果、どういうことが出て来るかと申しますと、これは自己本位の発見であります。自分はいくらにもわがままであった、自分の母親、父親、その他家族、社会に対してのあり方を三つの項目に照らして深く考えてみますと、自分のやった行い、口にしたことは、あるいはその時にいだいた思い、そういうものがすべてあまりにも自己本位であった、自分勝手、わがままであった、俺が俺という我執にこりかたまって生きてきたということがわかる。

それは発見であります。自己本位でない人間というのはおそらく一人もおるまいと思われずから、すべての人間がそういう事実を発見する。それで内観の本などを見ますと、自責的な観念が必要であるとか何とかいっていますけれど、必要だから自責的な観念、罪責感を起こさせようとしても起こるものではない。それは事実であるから発見するわけである。事実だから起こさざるをえない、自責感は当然起こってくる、それが内観です。

そのようにして自分の真実の姿がわかる。それがわかってみれば、自分というものはまことに醜惡なものであるということがわかるわけがあります。そういう自己本位に自分がふるまった結果がどういふのであるかということも同時にわかります。結果は自分は不幸な目にあった、例えば非行少年であれば少年院にいられた、あるいは刑務所にいられた。あるいは普通の人間人でありましたれば酒を飲んであやまちをしたとか、夫婦喧嘩をして一家皆泣いておるとか、いろいろ自己本位にふるまった結果が不幸であるということが同時にわかります。すべての不幸のもとには自己本位であるということがわかってくるのであります。それで自己の本体は愚劣以外の何ものでもないということがわかってくるのであります。

これは何もノイローゼの人のみがそうであるのではなく、誰もこのやり方で反省すればわかるのであります。

古い話では、ご存じのようにギリシアのアポロンの神殿には「汝自身を知れ」という言葉がかかげてあるそうでございます。ソクラテスがそれをいろいろ哲学的に考えまして、結局自分の無知を知ることが一番大切だと言っておりますが、ソクラテスのような偉い人でも自分は無知である、自分は愚かである、自分ほど愚かな者はいないということがわかる。それがデルフォイの神殿にかかげられた銘でもありませんし、ソクラテスが教えたことでもあるわけでございます。それがこの内観によって我々にわかってくる。だから自分の無知を知るといふことは古今東西を通じてあやまらない真理なんです。自分は偉いと思つて、本当に偉い人は一人もない。ソクラテスをはじめとして皆然ります。シナの善導大師は、自身はこれ現に罪惡生死の凡夫と言われた有名な言葉がございます。自身は罪の深い凡夫である。同じようなことは法然も親鸞も申しておりますし、パウロは自分

は罪人の頭であるということも言うておるくらいであります。自分の愚劣を知ることとは人間の当然知るべき真理でございますが。それを内観は教えるわけでございます。

それから次にわかりますことは、被愛の事実ということです。被愛というを使いなれない言葉ですが、愛せられておる事実、これを発見するんです。内観がだんだんと進んでまいりますと、父とか母とかその他から自分は非常に愛されていた、大事にされていたということがわかる。そういう事実がわかるのです。ある食欲不振症の女の子も父を大変恨みまして、お父さんにはものも言わない、お父さんが触ればその洋服を洗うというぐらい父を嫌っておりましたが、お父さんは自分を非常に大切にしてくれている、愛してくれているということがわかった。

事実そうでありまして、父親としては一生懸命娘を心配して大事にしておるのですが、本人はそれがわからなかった。内観をしてその事実

を初めて発見できた。その被愛の事実はいかなる人間も一人前の大人になった以上は必ず、人々の愛の手によって育てられておるわけでありますから、すべての人間は内観をしていけばわかるわけであります。しかも事実でありますから、その被愛感という感情を無理やりに起こさせるわけでも何でもない。事実を発見すれば、そういう感謝の心が起こってくるのは当然であります。それに気がつけば、非常に自分は愛されておる、大事にされている、周囲の人から自分も愛されている、今までは気がつかなかった、目が開けなかった、そういうことがわかってくる。

ここである話を思い出しますが、ある人がアマゾン河が海に入った所で船が遭難してボートでただよっておりましたが水がない。そこに通りあわせた船に飲料水をくれと信号したのですが、するとその船から足下の水をひしゃくで汲んで飲めという返答がありました。そこはア

マゾン河の河口でありましたので真水であったのであります。ところがわからないからのどの渴きに苦しんでおったわけです。

内観はわずか一週間ですが、それをその後のいわゆる日常内観でもって周囲のすべての人に及ぼして考えていかなければならないのでありまして、すべての人々にこの考え方でいきますと、いろいろな事実を発見する。すなわ

ち、周囲の人から大変お世話になっているという事実、あるいはさらにそれを自然の風物にまで及ぼしていきますと、宇宙の中で自分はあらゆる物から恩恵を受けているということがわかってまいります。

（『歩むもの・道のうた』へ内観研修所発行より）



特集「内観の原点を探る」

結局内観とは何か

吉本 伊信

「お前自身今どのように思っているのか」と尋ねられますと、

“見る人のこころ心にまかせおきて

高嶺に澄める秋の夜の月”

悲しい目で見ればお月さんで悲しいものや、淋しいものや。嬉しい嬉しい時に見ると、そのお月さんが非常に嬉しい有り難いと見えます。

今内観の本を図書館で並べるときに、

「心理学というのは人間を改造する学問や。

内観も人間を改造するのやから心理学のコーナーに並べて置こうか」

「いやこれはやはり、内観教育といって教育ですよ、ですから教育の部門に置いておかんと」

「徳を育てるには、これが一番よいです」

「いや、やっぱりこれは宗教ですよ。お釈迦さんの真似をするんやから、これはもう宗教の極意ですね」

「いや、これは道徳倫理ですよ。倫理、道德のコーナーに入れたらよいですよ」

結局置き場がないんです。

どの範囲にも入らないんです。結局内観は内観である、ということより仕方ないんです。

なにになにであるというような宿を借りなくてもよろしい。“己を知る”という一つの技術であり、訓練であり、トレーニングの部門であります。

それが見よう、取りようで「ああ、あれは医学や、内観は医学である」。

それでもよい訳です。

しかし「内を観る」法と書くと、何か宗教臭い感じがして抵抗のある方は、「自己観察法」とか「自己洞察法」とかいうようにしてくださいって結構だと思います。

『内観と精神衛生』という本にですね、竹元先生の「内観と医学」という文章を入れてあるんです。それが、あまり有り難いのでそれだけ別刷しているんです。

まさに内観は医学であるといえます。あれを読ましていただきますと、医者であって宗教家以上の詳しい事が上手に書いてあるなあと思ひまして吃驚しているんです。

そこで、なにになにであるという事にしなければどうのこうのという問題でなしに、要は人が幸福になればよいんです。

人が救われればそれでいいんです。そのあと、なにになにであるというような分類上の事は枝葉のことですから。

「どうして救われるんですか」

と、尋ねられますと「俺が俺が」という恐ろしい「が」、仏教ではこれを無明の闇と言います。これを少しでも滅ぼす、それが内観の目的でもあり、我々人間がこの世に生まれて来た目的でもある訳です。

無明が地獄へ引っ張り込んで行く恐ろしい奴です。

如何にして「俺が俺が」という我を滅らすか。自分の罪を自覚する、もうこれより他にないんです。

罪を自覚する時、自分の無力さがわかって来ると、親の恩がわかり、周囲の恩がわかり、社会の御恩がわかり、総てがお蔭さんの世界に生かされてもらえて居るんだということが身をもって自覚できるんですね。

智識として覚える物知りではなしに、体で覚えていただくであります。水泳のようなものです。（『第一回内観学会発表論文集』より）

味わいある言葉

森川リウ

吉本伊信先生の義母。日常内観を生涯続けられ、吉本先生が最高の内観者と賞した。昭和四十年八十歳で逝去。

「年がいったら、さしてもらおうと思うても、身体が動かなくてできないことが多いんです。そういう時は、できない、こんなふうにしようとか苦しむのやなしに、自分はこの格好で済まんと思うて、ただ頭を下げさしていただくんです」

「お仕事一つでも、自分がしていると思うたらしんどいというような気分で、させてもらうと思うたら何やら楽ですのに、してる、したというような気分が出てきて、ああ、全部自分の力やないのに、またなあ……と思わしてもらって……」

「この世はあんまり自分の勘定どおりではないような気がして、お仕事でも、前は、楽したら得みたいと思うてましたけど、今はもう、我が身に与えられた身体の方だけ働かせてもらうたら……もしできあえんようになったらできあえんで、まあええわというような気分で……させてもらうてもそんな気がしますのやけどね」

「若い時であつたら、値切って買うた方が得やと思いましたが、今でしたら、無形というものを思いますと、そんなんは余り頭をひねることないように思います。」

こっちで損したかて、こっちから入ってくるという無形の勘定、仏さんの勘定ということを、ちょいちょい見せてもらいますねん」

「お金お金とカンカンになっている時より、みなさんのお蔭で日暮らしができてると思うてあんまり力を入れん時のほうが、かえって豊かな日暮らしがさせてもらえて」
「嬉しいというのに二つあります。」

自分がうぬぼれて嬉しいのと、こんなもん（自分のこと）がこんな生活させてもらうて嬉しいのと二つあります」

「自分の間違いは誰にもわかりませんが、結局は自分の身体にしんどいのか楽なのかハッキリします」

「身体を使うてなった病気は、身体を楽にすれば治ります。」

心を使うてなった病気は、身体を楽にしても治りませんが、自分が自分を苦しめていたことがわかって治りました」

「若い時なんか映画へでも行ったら気が晴れるか知らんと思うて行っても、帰ったら同じや。今はもう、そんなお金だして、暇ほかさんでも（捨てないでも）、ここ」

（胸）で見せてもらうて……」

ある問答より：

（私自身は、自分の一番問題にしておりますことは、人間の生とか死という問題が私の一番研究の課題というとおかしいんでございますけれど、そういうものと取っ組

んでおりますし、ま、そういうことについて、自分も徹底してみたいと思っておりますんですが、先ほどおたずねしました死んだらどこへ行くか、死んだらどうなるかということの、ギリギリ決着をですね、お聞かせ願いたいと思うんですが」

「私、前に言うたように、もう自分がしぶとい人間やなあと思わさしてもらうと、そんなことでも自分が思っているんじゃないということに、思わさしてもらう時がありますねん。」

なかなか私みたいな人間が、反省ということをするまでは、一つも自分が悪いと思うこと、一回もなかったです。自分はええとばかり思うて、主人からよう考えたらええと言われても、この上考えることないと言うておりましたけど、主人も反省ということを知りませんし、私も知りませんから、この上ないと思いましたが、今にしたら一番大事なことは、死ぬほど大きなことではないのに、小さいことに心を寄せてるのやなあと思います。やっぱり、あんなさんのように死を思うやつを、こうぐっと思いつめられるお方は少ないです」

（死ということをどう見られますか、これも端的に一つお聞かせ願いたいと思うのでございますけれど）

「私らでしたら死と死っている中から、自分の悪い心を見せつけられるよりほかに何も無いのです」

（先ほど何回も重ねて、おたずねしました死んだらどこへ行くかということについて端的なお答えを）

「それも、今まででしたらそんなことも思いましたけど、今でしたらこんな奴がなあとはっかり思うて、どこへ行く、かしこへ行くてそんなんに思わないで、自分のしぶといのを見せつけられるばっかりで……」

森川さんのお答えは、一見質問に対してまともに答えていないように見えるかもしれませんが、人間の答え方としては、もっとも誠実なお答えです。

自分がしぶとい人間やなあと思わせてもらうと、そんなことでも、自分が思っているんじゃないと思わさせてもらう時があるという言葉こそ、自我の枠を超えたところからの声でしょう。

この（お二人の）問答について、吉本先生の興味深い解説があります。

「うちの母に対する今死んだらどうなるかという問いに対して、母の答えが非常に曖昧模糊としていますけれども、真宗の御法義といえますか、御示談の本質はこれより他にはないんです。今死んだらどこへ行くか、この問いに対して、ああ極楽へ生きますわと簡単に言うている人もあれば、もうワシみたいな人間は地獄行きですわと言っている者もあるわけですが、その言葉に用事がないんです。

本当はその時の態度、その人が身体を地面にたたきつけるような、くずれ落ちるような真剣味、自分をどん底に問いつめるまじめさといえますか、それが一番大事な問題やないかと思えます。

母の場合は、今までそういう場面に何百遍となく会ってきていますので、今でも大

事かけて坐るといふことは、魂が大事で坐るわけですから、死後の永遠の生命の行き場所といふことについては、自分を磨いて鍛練をしているわけだ。

それでなおかつ腹の底には、どういふ答えが出るんかというところ、ウンともスンとも答えられない、炭団玉（たどんだま）のようなものしか持ち合わせないといふことをおっしゃっているわけです。母の答えは。

そこであの言葉から推しはかるわけですが、めくってめくってめくりぬいても黒い炭田しかないといふことに目覚めていくことが、オレがという我がすたれてきて、本当は如来まかせ……凡夫のはからうべきことにあらず、というところにたどりついていくんじゃないかと思うんです。

それが内観を全然せずに、後生ほどの一大事、凡夫のはからうべきことにあらず、如来まかせやといふようなことを読んで覚えて言うてゐるなら、これは全然話にならない。聞きものですからね。

本当に後生大事をかけて自分を調べていって調べていって、結局は地獄は一定住み家ぞかしといふことより仕方がないのですが、それさえもなおかつ、それならばもっと真剣にならなくてはいかんじゃないかというても、ビクともしない恐ろしいやつが下におるだけやといふことで、ただ涙流してへり下って、落ちるより仕方がない自分の業をだいて泣くより道がないわけです。その姿はすでもう御心のままになしたまえといふところにたどりつくわけですね……」

（金光寿郎『東洋の知恵・内観』（光雲社、昭和60年初版発行）より）